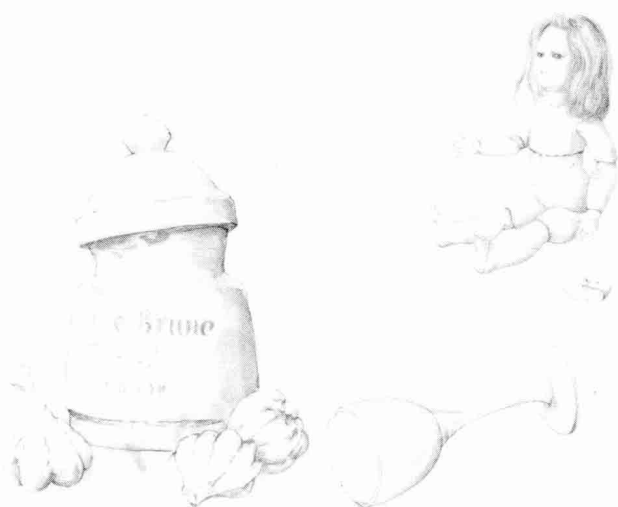


老いたるシンデレラ

阿部光子



阿部光子
老いたるシンデレラ



老[＊]いたるシンデレラ

昭和五十六年 一月 五日 発行
昭和五十六年 五月二十五日 二刷

定価 九八〇円

著 者 阿 部 光 子

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式 会社 新 潮 社

郵便 番号 一 六 二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部 (03) 二六二一 五二

編集部 (03) 二六二一 五二

振替 東京 四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

もつと空気を 5

虹の名残り 49

こわれた橋 77

野の家にて 101

老いたるシンデレラ 149

装画
栗原喜依子

老
いたるシンデレラ

もつと空気を

その土地を買うとき、克子はひとり息子の明久も一緒に連れて行った。武蔵野の一隅を切り拓いて、雑壇式に造ったありきたりの分譲地であったが、克子が夫の杉本弘造と、日当りの具合や地の利などについて、あれこれ僉議せんぎしている間、明久は、盛り土の下からたくましく顔を出している雑草の芽をつまんだりしていた。彼の笑顔は早春の光の中にとろけそうだった。

「どう、ここ、気に入ったの」

克子は明久に声をかけた。

「うん。とても」

彼はその笑顔のまま立ち上り、現実のものであるかどうかを確かめるように、ぴょん、ぴょんと土の上を飛んだ。

「やっぱり、ここにしましうよ」

克子はふっと吐息をついて言った。明久がぴょん、ぴょんと飛んでいる姿は、克子に思い切つて、ここを買え、ここを買えといっているようだった。

「そうだなあ。通勤には少し骨が折れるけれどもね」

夫の弘造は、まばらに家が建ちかかっているその分譲地を見渡しながら呟いた。

「通勤ね!!」

克子は、声には出さずに言っ、弘造も根っからのサラリーマンになったものだなと思った。

弘造は旧制中学生だったときに終戦を迎え、終戦後の混乱の中で、洋画を学んだのだが、克子と結婚し、明久が生れると間もなく、絵筆を捨てて、家具会社のデザイン部に入った。克子がいくら留めても聞かなかった。

その瞬間、克子は娘であったとき、戦災で焼けた家の跡に佇ち、ハープのように絃だけになったピアノを見たときの、畏れをまじえた悲しみを思い出した。焼けて裸になったピアノの絃は、たとえば秋風が吹いて来れば曲をかなでるであろうが、人間の手が触れたら最後、崩れ落ちてしまふだろうと思われた。そして、その日が、実生活での克子とピアノとの別れの日であった。父も母も、焼け跡に店を再建するのに一心不乱であった。克子は、もうピアノを習わせて欲しいとも、上級学校へ通わせてくれということもできず、両親の手伝いをした。

両親は、東京郊外の新開地で、洋品店を経営していたが、戦争中は繊維類の統制のために、店じまいをしていたのだった。それが、戦後の混乱の中で、いち早く焼け跡にバラックを建て、店一杯に下駄だろうと何だろうと、商品を並べるといふやりかたで、忽ち、店を戦前よりも大きくした。

両親は息せき切って物資を追いかけた。何でも並べてさえおけば売れた。——欲しがりません、勝つまでは——と、戦争の間じゅう、掛け声を掛けられ、堪えに堪えていたもの欲しさも、そこ

らじゅうに雪解水となって溢れ出た感じだった。その上、戦災に遭った人も遭わなかった人も、肌着だけは欲しかった。疎開先から取り戻した外出着を売っても肌着は整えなくてはならない状態だった。克子の両親は、先祖代々の商人であったから、その時世の隙間にもぐり込んで根を張り、店の土台をゆるぎないものにした。駅前広場を作るために、僅か削られた店の敷地の賠償金で、思い切って建てた三階建ての店舗は、その後、ぞくぞく新築される周囲の建物にも遜色なく、二階を美容院、三階を住居にしたのも、適切な思いつきだった。

こうして、着々と両親は事業を發展させていったが、克子の心の翳は日ましに深くなった。それは店の發展と同じ速度であったが、両親は自分たちの成功に有頂天であったから、娘の克子の心の翳に気づくどころか、克子の表面だけをみて、もったいぶっているとか、愛想のない娘だとかいって嫌った。

克子は焼け崩れて、裸を自分に見せた。ピアノがいとおしく、まるで死んだ姉妹を思うように、焼けたピアノのことをいつも想っていた。勿論、もう一度、せめて、ピアノだけでも買ってくれと親にせびろうとはしなかった。財産からいえば、以前、克子にピアノを買ってくれた頃より、何倍かの金持になっている両親は、商売のためにならないピアノを買おうとは、思いも寄らない心境だった。それに、克子の毎日の忙しさは、とてもピアノを弾く暇を生み出せるものではなかった。朝おきてまず、店の掃除をし、銀行や問屋への使いにも行った。両親は娘がいつも憂鬱な顔をしているのを、訳は分らず嫌いなながらも、その働きぶりには満足していた。その重宝な娘を、嫁にやろうと決心したのは、両親の仕事に大事な取引先の子から求婚されたからだった。

克子もまた、朝から晩まで、あらゆることにそろばんの音をたてている両親の傍を逃れて、商社勤めの男とふたりきりの家庭を持つことに、幽かなあこがれを持って結婚した。しかし、暫くして気がついたのは、この男の頭には無形の計算機があつて、何かにつけて、カチャカチャと計算することだった。まだしもカチッと置かれる父親のそろばんのほうが潔かった。

とうとう三年目に、克子はこの家を出た。子どもも産まれない索漠とした生活には堪えられなくなつた上に、幼なじみの杉本弘造が隙間風の入り込む借りアトリエで、一心に画を描いている姿に、心ゆすぶられたことが直接の原動力となつた。

いよいよ、婚家を出ようと決心したとき、克子の眼に浮んだのは、絃だけになつたピアノではなくて、そのピアノが恥しそうに立っていたわが家の焼け跡だった。思ひの外に狭く、片手で掩えそうにさえ見えたのだった。その頃は、店の奥に住居があり、池のある中庭もあつたのに、焼けてしまえば、ほんのひとまたぎの幅であつた。こんな小さな土の上に建てられた家の中で、泣いたり笑つたりしていたのかと思うと、ひどくはかない氣持がした。それを思い出すと、克子は——この家だつて焼けてしまえば——と、夫が日頃、自慢のたねにしている新築の檜造りの家が阿呆らしく見えた。百坪以上もある——と口癖のようにいう庭にしても、草むしりの骨折場ではないか。

婚家から出て来た克子を、両親は氣違いだといった。勿論、勘当された。しかし、克子の胸は希望にふくらんでいた。それから十何年かの月日は過ぎ、克子は弘造との家庭づくりにいそしんで来たが、今、五十坪足らずの土地を買う思案をしているのだ。檜造りの建築などは思いも寄ら

ない。差当って土地を抵当に入れた借金で家を建てるのだ。その借金を返すのに、何年かかることか。かの女の胸の中には、あわただしく頭金やら返済金の額が、書かれたり、消されたりした。かの女のそばんは、たいへん冴えない音ではじかれている。

梅雨に入る前に家建ててしまおうというのが、克子たちの計画であつた。設計図は何年も前から、克子が唯一の愉しみにして、書き直したり、つけ加えたりしていたのだつた。克子の結婚生活は、隙間風の吹き込む借りアトリエで始められたが、明久が生れてみると、その隙間風は放っておけないものになつた。手の届く限りの隙間はセロテープや反古紙で張つたが、アトリエの高い天井はどうしようもなかつた。アトリエの東南に張り出した四畳半の部屋が寝室でもあり、茶の間でもあつた。これが雨戸もないガラス戸だけの造りで、明久の寢床はカーテンと屏風でかばつてやる外はなかつた。克子は、昼間は小さく畳まれて、狭い部屋の邪魔をしない屏風を發明した人に感謝せずにはいられなかつた。

焼け跡のバラック生活や、物資不足の訓練にも耐えて来ていたので、克子は狭いアトリエ生活の愚痴をいったことはなかつた。いふどころか、不満に思つたこともないのだつた。しかし、克子自身、少しも気づかなかつたが、愚痴をいわない女房の圧力が、ある種類の男の神経を参らせてしまうのだつた。それともしらず、克子は、ただひたすらに窮乏生活の中を泳ぎぬき、切り抜けていった。それはちょうど、克子の両親が、娘ごろやピアノや、そういったものにはお構いなく、それ稼げ、やれ稼げと、三階建ての店舗を建築したのとそっくりだつた。

ある日突然、まるで克子が婚家を出ると宣言したように、弘造が画を描くのをやめると言い出した。そのとき、克子は驚くより何より先に、とっさに、青天の霹靂という言葉が頭に浮んだ。漢語を使うのが好きな両親が、仕入れ値段の値上りにでも何でも——全く青天の霹靂だよな——というのを思い出したのだろうか。克子の離婚宣言のときは、そんな言葉を使うゆとりもなかったかして、父親は——お前。な、なんだって、そんなことを。なんの不足があるんだね。結構なくらしをさせて貰っていて、それじゃ、今日さまにすむまいがね——と、甚だ庶民的な言葉で愚痴をいったものだった。

青天の霹靂という表現そのものが、多分、今の自分の心境なのだろうと、克子はあとから確認し、それから、もそもそと、もう一度、考え直してくれと、夫に申し入れを行った。しかし、今日さまという重宝な拠り所もないために、申し入れ側の腰がゆらぐ。あれこれと、理由を申しのべて、夫を勇気づけようと試みるのだが、結局は、自分がこれほど辛抱しているのに、そして、骨折って生活を維持して来たのに、絵筆を捨てるとは何事かとの詰問ともなり、恨みつらみともなる。それも、髪ふり乱して、がむしゃらに、あなたア、あんまりよォと縋りつけば可愛気もあるが、一応理路整然と形を整えて、筋道立てた口をきくだけに、話が重たい。そして、最後が、今日さまでなくて、お克さまに相すまなくなるのでは何とも格好がつかないではないか。

とうとう申し入れは腰くだけで効を奏せず、弘造はサラリーマンになった。その上、案外、しよげもせずに毎日通勤し始めた。彼の父親は地方公務員で、恩給生活を故郷で楽しんでいる。蛙の子は蛙。結局、この男は芸術家で大成する男ではなかったのだ。サラリーマンが好きなのだ

——と、夢破れた克子は、心の中で夫を罵った。実は、自分も蛙の子で、親ゆずりの突進型だとは、少しも気づかず、その上、夫に愛想をつかすと、ひとり子の明久に夢を托した。見込のありそうな商品を有金はいって買い占める投機心に富んでいる親そっくりだとは、顧みるゆとりもないまま、克子は、明久の教育に打ち込んだ。

絵筆を捨てれば住む必要のなくなったアトリエを出て、一家は勤め先に近いアパートに移った。一階が店舗、二階が貸事務所、三階から上が住居という、都心の公営住宅が当たったのは、ほんとうに今日さまでなたさまかの肩入れのようであった。

隙間風というものが、どれほど人間の体温を奪うものか、身をもって体験しないと分らないものだ。アパートに移っての初めての冬、克子はこれが同じ東京かと疑うほどだった。ストーブは夜だけ焚けばじゅうぶんで、三DKのかの女らの住居は、昼間は太陽熱で、ぼかぼかしていた。夏になると、トタン屋根を焼く太陽熱がアトリエの中の空気をわき立たせたものだったが、アパートでは、外から入って来ると、思わずほっと一息つけるほど涼しかった。コンクリートの壁が、外気の寒暖を遮っているのだった。

住居との戦いにも一息ついた克子は、隣りの主婦に誘われて造花づくりの内職を始めた。出来上った製品は当番が届けに行って新しい材料を貰って来る。当番は一月にいったん回って来るだけなので、儲けは少ないが、楽な仕事であった。克子はよちよち歩きの明久の守りをしながら、せっせと造花づくりに励んだ。どうしてもピアノを買ってやりたいと念願したからだった。明久に音楽の才能があるかないかは分らないが、習う機会は与えてやろうと決意したからには、ピアノ

を買うだけではすまない、先生につく費用も、ステレオもある。娘時代から婚家にいる間も、適当に貯め込んだ金の扱いがうまいので、アトリエ時代にかなり減らしはしたものの、練習用のピアノを買うぐらいいは残っている。しかし、これも蛙の子で、時は金なり、寸暇もおろそかにせず、有用に使うて、時を金にかえておくべきだと考えたのだ。

明久は四歳になると、ピアノのレッスンを受け、絵画教室にも通った。しかし、格別の才能があるようでもなく、そこら一般の子どもと同じに練習をさぼったり、稽古日を拒絶したりした。

学校へ通うようになると、克子はきびしく予習と復習をさせた。一字一句、明久の頭に叩き込むように教え込んだ。しかし、成績はそれほどよいとはいえなかった。克子はがっかりした。この息子の脳味噌はあげ底ではないだろうかと心配した。

思いがけないことに、その頃から明久は喘息の発作を起すようになった。かかりつけの医者は、小児喘息は年頃になれば、大抵なおるものだから、親はあわてないでゆっくり看病して欲しい、一時押えの吸入器などをあまり使わないようにと注意してくれた。いくらそういわれていても、発作が起きると、克子はいても立ってもいられなかった。明久は身を縮めてせき込み、克子があわてふためいて背をさすったりするが、一向、よくなるのにじれて、しまいにはあちへ行つてというふうに母親を手で押したりした。

弘造は、小児喘息は、教育ママの子に多いそうだと厭味らしいことをいった。造花づくりの仲間の家にも、小児喘息の子は幾人かいた。——都心に近いアパートにはこの病気は多いそうよ。ほら、ごらんなさい。この洗濯物のすす!! ——と、克子は明久の病気を公害のせいにし、風の